木漏れ日

杉山智哉

妻の淹れた珈琲を夫が嗜んでいる
路傍に落ちる雨の音が
まだ終わってほしくないと
干渉のない緩やかな時間の流れは
床に運ぶ温度になっている
商店街の茜色　散歩道の曙色
石を蹴って　川を覗いた
どこにでも落ちているような
温度に包み込まれる
二人の邪魔をしまいと
庭の金魚鉢に蛙が飛び込んだ
古書の香りと茶の香りに音がして
懐かしむ間隙が落ちていき
底のない記憶の中で
鳩の鳴く縁側の風鈴を揺らす
畳の匂いの奥にある
扇風機の音に目を瞑り
百日紅の花を思い浮かべて
深い香りの珈琲を一口啜った
麦わら帽子から薄茶色の髪が靡く
目線の先で猫が何かを追いかけていた
夏影に隠れながら
目に入るものを言葉にする声が
肌を撫でる感覚を残して